

あがたい
縣居翁・賀茂真淵は郷土の誇り、日本の宝

賀茂真淵翁遺徳顕彰会

会長 山下智之

三月 河上春月

河柳 かげも木ぶかく 打霞み

むつ田の淀に 月更けにけり

政藤

真淵がまだ在郷時代（二六歳）に歌われた『河上春月』の歌です。

真淵は、万葉記紀の歌謡を第一としていましたから、上代から万葉までの歌を高古雄健の益良男振（ますらおぶり）と評していました。

「古こそ万によろしければ 古事をこそ尊めれ、何にか古へをすてて、下れる世ぶりにつけてふ教のあらむや」と歌道における復古を期待していました。

「人の真情を自然にさながら声にあげてうたひ出すのが歌であると言ふ」この考えは真淵の歌に対する姿勢として評価されるものでした。

三月という真淵の生まれた月に、春の陽光うららかな折に歌われた『河上春月』は、河柳が生い茂る遠く奈良の六つ田を感じ取り、そこから眺める春の月がいいと万葉調に歌い上げています。

真淵は、まだ政藤と名乗っている時代の名歌を次々と作り出していました。

顕彰会会員継続のお願い

賀茂真淵翁遺徳顕彰会が発足して十か月、当会が着実に歩み始められたのは、ひとえに会員の皆様のご支援の賜と感謝しております。新年度を迎えますが、皆様には来年度も引き続きご支援を継続してくださいませよう、よろしくごお願い申し上げます。

浜松近郊の真淵歌碑

浜松市浜北区 岩水寺



賀茂真淵翁 詠

岩水の しづくの洞の つらら石

幾つらつらの

世をか経ぬらん

宝暦一二年（一七六二）真淵六六歳。

真淵の漢学の師渡辺蒙庵の門人中瀬の国学者大城清左衛門から「岩水寺を遠江十二景の一つに詠んでもらいたい」の要請によるようだ。

真淵は、子息真滋に「つらら石は洞窟などの雫の千載を経て凝たるが石の如くなれる也 薬になりぬ」と書いている。

歌意は、「岩水の雫（しづく）によって出来た鍾乳石は、いく世を連々（つらつら）と経てきたであろうか」

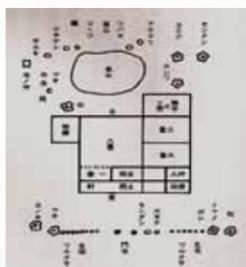
格助詞「の」連続は、滴り落ちる雫のリズムを醸し出し、更に「つらら石」幾つらつらの世へと続く言葉の連なりが音の調子の良さを生み出し、鍾乳石のイメージと言葉が響きあって、年月の永さが思い描かれていくという巧みな構成といえよう。と評される。

賀茂真淵翁を知ろう (3) 真淵の生誕① 元禄 10 年 3 月 4 日

賀茂真淵は、元禄 10 年 (1697) 3 月 4 日、遠江国敷智郡（ふちぐん）浜松庄伊場村（元岡部郷）今の浜松市中区東伊場で生まれました。生誕 320 年になります。

真淵の父は、岡部政信と言ひ、代々賀茂神社の神官を勤める家柄の人で、母は遠江国長上（ながかみ）郡天王村の名流竹山家の人。

真淵の幼名は三四と言ひ、ソウシと読んだ。真淵の父はユーモアのある人とも、反面、面倒くさがり屋だったか？ あるいは、わが子に人一倍の愛情を持ちながらも、生活が厳しくゆとりが乏しかったのだろうか。中年に生まれ、ただひとり残った男の子である真淵を、何度か他家に養子として出さなければならなかったようで、岡部家の家計の程が思われる。

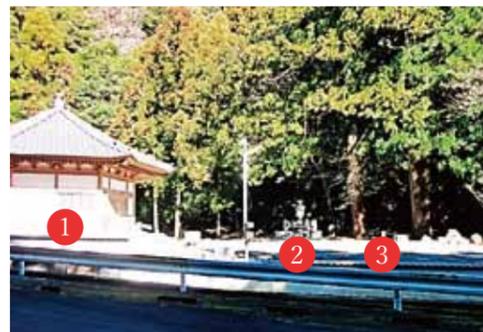


真淵の生家は、父の隠居所であった。当時の間取りや植え込み。



生誕地には、現在「賀茂真淵翁顕彰碑」と「井戸跡」が残る。

岩水寺と鍾乳洞



浜松市浜北区の岩水寺は行基菩薩開創（七二五年）の真言宗の大寺。家を守る岩水寺と言われ子安地藏尊をまつる。境内を道なりに進むと奥の院本殿（六角堂）①。朱塗りの橋を渡ると天竜石の真淵の歌碑②。その横が鍾乳洞③。昭和四九年の七夕豪雨で崩壊したが、諏訪湖に通ずると言われた観光名所。

※賀茂真淵記念館・中央図書館鈴木正之先生から資料をいただきました。

縣居神社	灯籠坂	賀茂神社
生誕地	約 100 仞	
JR 東海 浜松工場	浜松商工 会議所	